岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　35

備中こうもり塚古墳

「吉備路風土記の丘」環境整備に伴う調査

1979.3

岡山県教育委員会

文化課

序

備中こうもり塚古墳は，総社市上林の低丘陵部にある巨石墳で，国指定史跡であります。この一帯は「吉備路風土記の丘」の中心地で訪れる人々もあとをたちません。本墳に対する学術調査はすでに昭和42年度に実施されたようでありますが，石室の入口あたりに未掘部分がのこされていましたので，石室内の排水が不良となっていました。そのため排水をよくするよう各方面から強い要望がもちあがっていました。このたび昭和53年度事業として主に排土作業をこころみ，同時に，次年度以降おこなう予定の整備事業にとって，遺構に損傷をきたさないよう，充分な記録処置をとることにいたしました。発掘調査については，岡山県文化財保護審議会委員である水内昌康，鎌木義昌，近藤義郎各氏から種々ご指導ならびにご助言を賜り，現地の発掘調査には，厳寒の時期であったにもかかわらず，幸にも岡山大学学生，岡山理科大学学生，地元研究者など多数のご参加をいただき，多大のご協力をうけることができました。あらかじめ関係者各位に心から御礼申しあげる次第であります。

ここに報告書を刊行する運びとなりましたものの，短期間で整理作業にあたったため，不充分な点も多々あろうかと思いますが，小報が文化財の保存や研究に多少なりともお役にたてれば幸甚これにすぎることはありません。

昭和54年 3 月

岡山県教育委員会

教育長　佐　藤　章　一

例　　言

1. 本書は，総社市上林字皇塚にある史跡こうもり塚古墳の環境整備にともない実施した事前調査の結果を，報告するものである。

2. 調査に先だち，文化財保護法第80条１の規定にもとづき，昭和53年11月７日付教文財第3869号をもって，史跡の一部現状変更申請を文化庁へ届出，文化庁より昭和54年１月30日付委保第４の1280で許可があった。

3. 本調査は，昭和53年度国庫補助金をうけて岡山県教育委員会が実施し，主として岡山県教育庁文化課職員葛原克人がその任にあたった。

また，同課職員，河本清・伊藤晃・柳瀬昭彦・平井勝・福田正継など各氏の助力をえた。

4. 調査協力者は下記のとおりである。

守安納平（山手史好会会長），風早猪佐男（山手村文化財保護委員長），守安筆子，守安智子，守安良子，守安玉枝（地元作業員），宇垣匡雅，秋山浩三，末永弥義，上中悦雄，丹羽野裕，田代健二，乗岡実，荒俣一雄，福田輝子（以上岡山大学学生），望月裕，谷山雅彦，掘川　純，岩崎仁司，佐伯修，河石久，小林一夫（以上岡山理科大学学生）。

なお，遺構の実測は，葛原のほか宇垣匡雅，秋山浩三があたり，畏友柳瀬昭彦君の協力をえた。

5. 調査にあたっては，章を改めてのべる前回調査の測図原点に合わせ，軸線もこれに準拠することとしたが，今回は50cm西のものを主軸線として測図した。なお，断面図における水準基線も前回調査に一致させた。その高さは，海抜高22.1347mである。図版中，特に明記していない場合は，この数値を表している。

6. この報告書に掲載した「こうもり塚古墳周辺遺跡分布図」は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の25,000分の１地形図を複製・縮小したものである。（承認番号昭54中複，第65号）。

7. 報告書作成は，文化課分室（岡山市西古松）にておこない，すべての遺物は同所に保管されているが，近い将来，「吉備路郷土館」へ展示予定である。

8. 本書の作成及び執筆分担は次のとおりである。

編集・執筆	葛原克人
復元作業	坪井和江，塩見康代，葛原
実　　測	宇垣匡雅，山本悦世，福井亮，葛原
製　　図	細川早苗，平井典子，葛原
写真撮影	井上弘，葛原

レントゲン写真は岡山県立「工業技術センター」にて撮影。

目　　次

序
第１章　備中こうもり塚古墳とその周辺 …… 1
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 3
　第３節　調査の契機 …… 4
第２章　調査の内容 …… 5
　第１節　調査前の現状と墳丘 …… 5
　第２節　羨道の構造と規模 …… 6
　第３節　閉塞施設 …… 9
　第４節　墓道 …… 10
第３章　出土遺物各説 …… 12
　第１節　遺物の出土状況 …… 12
　第２節　須恵器および陶棺 …… 14
　第３節　武具・馬具・装身具 …… 18
第４章　まとめにかえて …… 20

挿　図　目　次

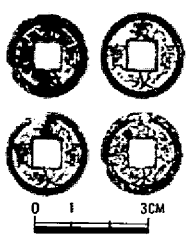
挿図第１図　こうもり塚古墳周辺遺跡分布図 …… 2
挿図第２図　封丘盛土断面図 …… 5
挿図第３図　石室　平・断面図 …… 7～8
挿図第４図　閉塞施設断面図 …… 9
挿図第５図　墓道内密封粘土帯断面図 …… 11
挿図第６図　遺物出土状態　平・断面図 …… 13
挿図第７図　石室模式図 …… 21

図　目　次

第１図　出土須恵器実測図 …… (2)
第２図　出土須恵器実測図 …… (3)
第３図　陶棺蓋実測図 …… (4)
第４図　武具・馬具等実測図 …… (5)
第５図　鏃・玉・その他実測図 …… (6)

図　版　目　次

図版１－１　古墳羨門部（前面より）……（７）
図版１－２　墳丘盛土断面（前面より）……（７）
図版２－１　閉塞石及び墓道内充填土（奥より）……（８）
図版２－２　墓道肩口（奥より）……（８）
図版２－３　墓道内一括須恵器……（８）
図版３－１　遺物出土状態（前面より）……（９）
図版３－２　遺物出土状態（奥より）……（９）
図版４－１　遺物出土状態……（10）
図版４－２　鉄　滓……（10）
図版４－３　鞍……（10）
図版５－１　単鳳環式柄頭……（11）
図版５－２　水晶製切小玉……（11）
図版５－３　鉄　鏃……（11）
図版５－４　須恵器高杯……（11）
図版６　陶棺及び須恵器……（12）
図版７　武具・馬具……（13）
図版８　鏃・釘等……（14）

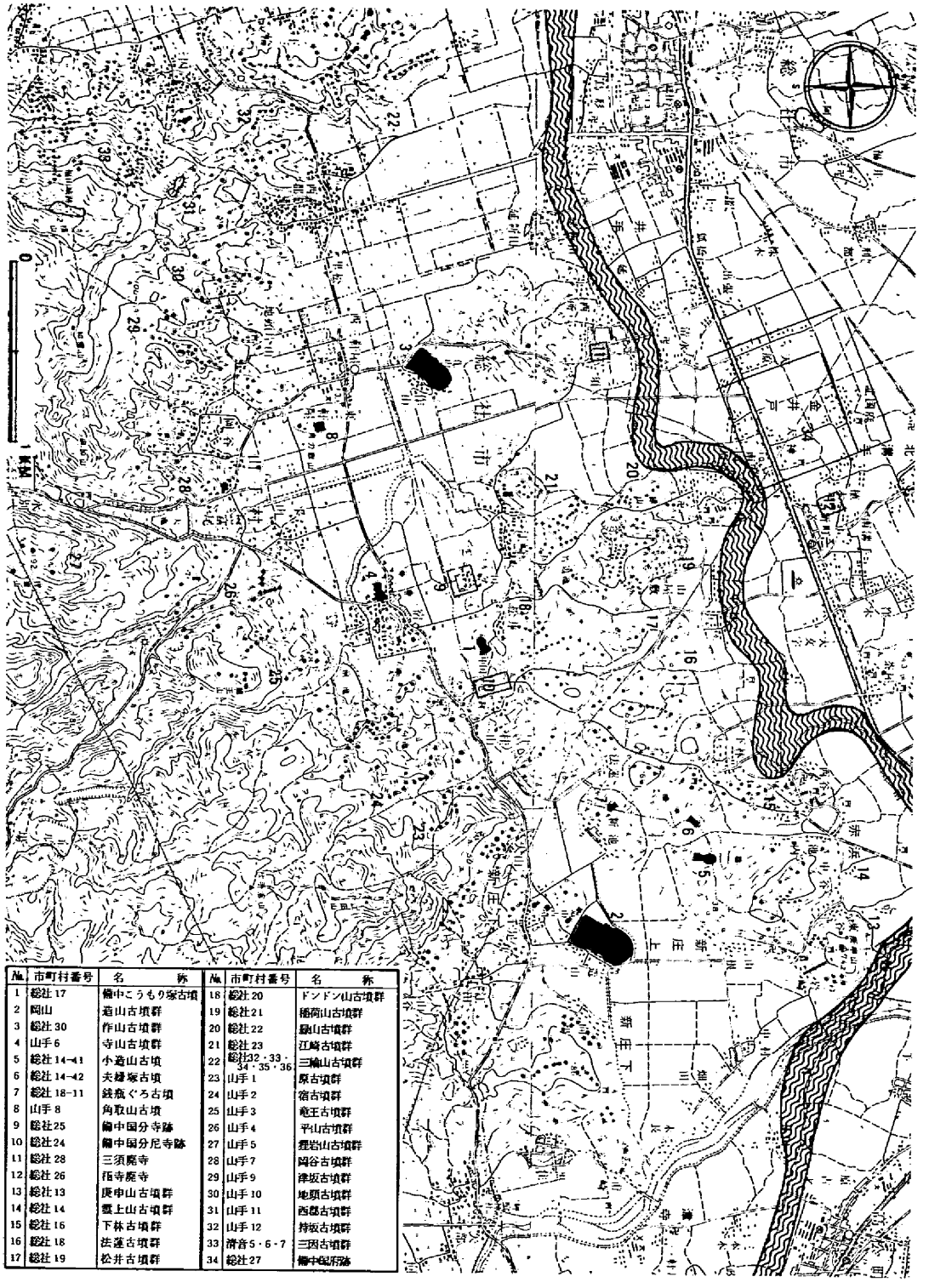


流土内遺物　S＝（2/3）

第１章　備中こうもり塚古墳とその周辺

第１節　地理的環境

備中こうもり塚古墳の築成された位置は，総社市上林字皇塚地内で，備中国分寺跡と同尼寺跡とのほぼ中間点の舌状台地上である。指呼の間に作山古墳をとらえ，東1.5kmばかりに造山古墳を，北 6.5 kmには古代朝鮮式山城・鬼城をのぞむことができるなど，古代吉備を象徴する著名な遺跡が隣接している。また，そうした巨大な，ひろく知られた遺跡だけでなく，実は歴史の発展諸段階に対応した大小さまざまな古墳や諸遺跡が密集している事実こそ，あわせて充分，解析されなければならないのである（註－１）。そこでまず，自然地理的環境をできるかぎり遡及して，その概要を記し，後述する古墳及び古墳群を理解する一助としよう。本墳の北には，ほぼ北東から南西方向へ走る標高60ｍ前後の低丘陵が連なり，やや西へ離れて三須の独立丘陵がある。南には，日差山，仕手倉山，龍王山，由加山，和霊山，福山など標高 200 ｍ以上の山塊がほぼ東西に峰を接して並立し，それぞれの主峰のさらに南方山裾は汀線にちかく，逆に主峰列の北側は安定した可耕地にめぐまれていたものと推定される。そのため，居住性の高い北側が古代の重要な生産活動の場となったのであろう。生活区を結ぶ主要道は，各主峰から北へ派生した幾本もの舌状台地の北端を結んでつくられたことを物語るように，旧山陽道が東西に走行している。この東西線はいくぶん位置の変遷をえたとしても，古代においてもまた帝都への道であり，同時に南海道へ通ずる街道であったに違いない。この古代主要道にはぼ平行して，先にふれた三須低丘陵が横たわり，その北方に肥沃な，広大な水田が展開しているのである。いま現在，総社市域にふくまれているが，古代の行政区にたちかえれば，ほとんどこの一帯は，備中国賀陽郡にふくまれ，一部窪屋郡に属したことが，『和名抄』にのこる郷名と現字名を付合させる作業をいとはなければ容易に判明する。そのばあい，郡を接する，郡を分ける，対象物が，いったい何であったのか，すこぶる興味のわくところである。別名，賀陽デルタともよばれる総社平野は，一見，平坦な田園景観を呈しているが，実はかなりの凹凸があって，村落はそれぞれの自然堤防上に営まれ，その周囲に水田が展開し，最も低い部位に旧河道が存在するのである。挿図１に示した旧河道こそ古代における「郡境の河道」であったといってよい。河道に接した北側が賀陽郡，そして南側が窪屋郡である。かつて私は，この想定に関して小文を草したことがある。すなわち，『備中国風土記』逸文には，「賀夜の郡，伊勢御神の社の東に河あり。宮瀬川と名づく。河の西は，吉備建日子命の宮なりき。此の三世の主の宮を造りし故に，仍りて宮瀬と名づく」（註－２）とし，宮瀬川なる河道の存在を暗示している点に留意したところである。いうところの逸文が，吉備建日子命の宮の位置を明確に語るところに主要目的があったとすれば，当時，国府はもとより国分僧寺・同尼寺などより明確な目標物がなお存在していたにもかかわらず，わざわざ宮瀬川なる河道を軸線として，相互の位置関係を示しているのであるから，今はなきこの河道は，古代においてかなり



No.	市町村番号	名　　称	No.	市町村番号	名　　称
1	総社 17	備中こうもり塚古墳	18	総社 20	ドンドン山古墳群
2	岡山	造山古墳群	19	総社 21	稲荷山古墳群
3	総社 30	作山古墳群	20	総社 22	鬼山古墳群
4	山手 6	寺山古墳群	21	総社 23	江崎古墳群
5	総社 14-41	小造山古墳	22	総社 32・33・34・35・36	三輪山古墳群
6	総社 14-42	夫婦塚古墳	23	山手 1	原古墳群
7	総社 18-11	銚瓶ぐろ古墳	24	山手 2	宿古墳群
8	山手 8	角取山古墳	25	山手 3	竜王古墳群
9	総社 25	備中国分寺跡	26	山手 4	平山古墳群
10	総社 24	備中国分尼寺跡	27	山手 5	狸岩山古墳群
11	総社 28	三須廃寺	28	山手 7	岡谷古墳群
12	総社 26	百寺廃寺	29	山手 9	津坂古墳群
13	総社 13	鹿申山古墳群	30	山手 10	地頭古墳群
14	総社 14	鬼上山古墳群	31	山手 11	西郡古墳群
15	総社 16	下林古墳群	32	山手 12	持坂古墳群
16	総社 18	法蓮古墳群	33	清音 5・6・7	三因古墳群
17	総社 19	松井古墳群	34	総社 27	備中国府跡

挿図 1　こうもり塚古墳周辺遺跡分布図

重要な意味を担っていたものと考えざるをえない，（註－３）と。それは，古代行政区をわける郡境の河道であると考えられるのである。この河道は，高梁川が総社平野へ突入する部位からやや南東に流身をとりつつ蛇行しながら東方へ流れやがて足守川の下流と合流し，そして，備前と備中の国境線に近い所を，北から南へ流走し，やがて「吉備の津」へ流れ込むのである。

第２節　歴史的環境

この備中南部平野とその一帯は，原始・古代を通じて諸遺跡の密度がきわめて高い。先学によって永年たびたび分布調査が実施され，その成果の積み重ねが集大成され，研究・紹介されてきたゆえんでもある。当面の古墳時代に，視点を絞って紹介するにしても，この一帯に形成された古墳及び古墳群の数は尨大で，約800基をこえるから，およその分布状況は挿図第１図にゆだねることとしよう。とはいえ，こうもり塚古墳の歴史的な位置づけを一定度果たすためにも，あらかじめ古墳時代の吉備の動向を素描しないわけにはいかないであろう（註－４）。

最近つよい関心をあつめている遺跡に，弥生時代後半から終末期にかけて築成された吉備地方に独特の墳墓があり，これを対象とした研究成果がある（註－５）。それは，特殊に飾られた器台と壷をともなう墳丘墓と規定される遺跡でその築成は単なる墓という意味あいを離れ，地域的な首長権の卓越化を示す指標とみなされている。総社市三輪山山塊（№ 22）に例をとれば，柳坪墳墓，鋳物師谷２号墓，宮山墳墓群など一連の特殊な墳墓が他の一般的な墓地から卓越・隔絶とさまざな形をとりながら累世代的に次々と築かれ，いち早く首長権が特定の氏族に集中する傾向をあらわした地域として知られる。首長権の確立過程を示めす墳墓の形態はやがて前方後円形に定形化し，系列的に，同一の尾根上に展開する。全長40ｍの前方後円墳・天望台古墳からひきつづき４世紀末の三笠山古墳を生み，５世紀代になるといっきょに墳形を小型化させつつもなお前方後円墳の形をとって舟山古墳を築成する。こうした在地勢力の動向が，ここではとくに顕著にみられるいっぽう，こうした傾向と対照的に５世紀代の前半には，巨大な前方後円墳が，低丘陵を利用しながらこの沖積平野の一角において築成されるようになる。全長約350ｍの造山古墳（№２）や全長約270ｍの作山古墳（№３）は，ただ単にその周辺地域の首長権を象徴するにとどまらず，吉備宗主権を掌握し古代吉備の全領域に君臨した王者の奥津城でもある。造山古墳の南前面に築かれた榊山古墳や千足古墳をふくむ６基の陪塚は「造山の被葬者である大首長をとりまく，一種の官僚的な立場の者の墳墓」（註－６）とされる。と同時に，それぞれの尾根線上に築かれた夥しい小円墳のいくつかは，おそらく５世紀代中葉から後葉にかけて築成された，より下位の在地勢力の力量を反映したものであろう。それぞれの尾根線に並びつくられた小型円墳の群は，そうした首長の系譜をさし示すものである。このように他方では，重層的な関係を生じながら造山古墳の被葬者のもつ吉備宗主権はやや小型のしかし大規模な作山古墳の被葬者へと継承される。それ以降，この地域に巨大墳はつくられることなく，わずかに全長約120ｍの宿寺山古墳（№４）が数基の陪塚をともなって築成されるにすぎなくなるのである。さきの両巨墳とは比較にならない規模で，吉備政権を代表する首長権はますます後退を余儀なくされたので

あろう。このように，5世紀後葉から6世紀初葉にかけては，権力構造の観点からすれば，断絶のときが介在して，ふたたび6世紀中葉以降，全長100余mをはかる備中こうもり塚古墳が，突如として現われるのであり，小円墳はこうした歴史的空白部をうめる貴重な歴史資料といってよい。

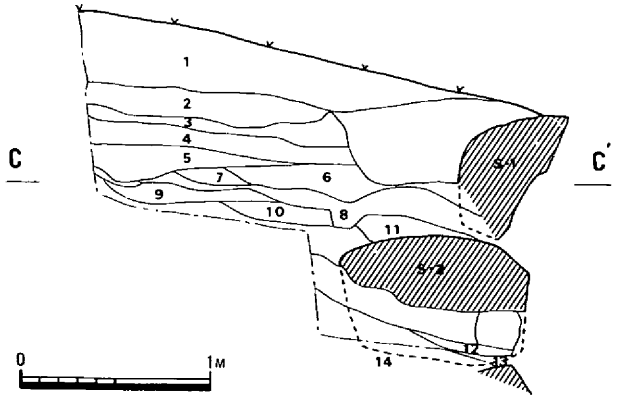
第3節　調査の契機

本墳に対する現地調査は，昭和26年に開始される。岡山大学近藤義郎氏らは，当時同大学の学生であった神原英朗氏など数名とともに，日照山国分寺を合宿先に定め，三須低丘陵一帯にわたって古墳の分布調査を実施した。そのさい同時に，こうもり塚古墳の墳丘測量をも試み1mのコンターでおよその墳形を描き出すことに成功した。その後，総社市教育委員会から発掘調査の依頼をうけた鎌木義昌，近藤義郎両氏は同市教育長と委託契約を結び，昭和42年3月，現地調査に入り，墳丘測量をはじめ石室内の玄室はもとより羨道部の大半についても発掘調査を実施された。その成果はおって公表されるはずであるが，この調査時に作成をみた墳丘実測図から，全長約100mを読みとることができ，以後，全長を表現するばあい普遍的に使われるようになったのである。ところで，さらにその後，昭和45年になって，岡山県教育委員会は「吉備路風土記の丘」建設構想の一環として，本墳についても一定の整備計画にもとづき，明らかな盗掘穴を土砂でうめ，封土の流失防止の芝張りをおこない，遊歩道建設に伴う本柵を打ちこむなど，県教委としては形状の大変貌をきたさないよう留意しながら施工したとはいえ，確かにある程度旧状と異なる形態として，現象した。ちょうど全国的に「風土記の丘」建設による遺跡の改変が進行する動向があり，こうした風潮に対して，県内外の多くの考古学研究者が強い関心をもってくりかえし警告を発していた時期でもあった。本墳は，自然丘陵を利用して築成された全長100余mの，後期古墳時代には珍しい前方後円墳で，かつ内部主体に巨大な横穴式石室が構築され，玄室にはまた貝殻石灰岩を原料とした大規模な家形石棺が安置されているなど，どの点をとりあげても，特異な存在であるから，よけいに強い関心を集めていたのである。県教委による整備は墳丘外表面においておこなわれたから，石室内部については，昭和42年の学術調査以後，そのままの状態が続いていた。この調査によって，墳丘の確かな規模や，玄室の構造，石棺・陶棺をふくむ遺物の配置状況，および出土遺物から，たびたび盗掘をうけていたとはいえ，被葬者の性格の一端についても一定の推察がなされるようになっていた。この調査からすでに10数年を経過した現在，玄室に流入する雨水によって床の一部が汚泥化して，それが床上面2～30cmに推積してきたため，排水のための軽微な，環境整備をおこなう必要が生じた。そこで今回，計画された発掘調査は，未調査部分の羨道部とその前面に展開するものと予想される前庭部について，排土作業を実施しつつ，次年度以降の整備計画にとって誤りないよう，遺構の存在状況をしっかり把握しようとするものであった。発掘調査は，昭和53年12月1日から約2箇月間を要して，ほぼ所期の目的を達することができたので，以下，概要を報ずることとする。

第2章　調　査　の　内　容

第1節　調査前の現状と墳丘

本墳は北東から南西へのびる舌状台地の端部に位置し，前方部を丘陵頭部へ，後円部を丘陵尾部へ向けた，一般的には，2段築成の前方後円墳とみなされ，全長約100mとされている。ところが，後円部にのみ明瞭な，人為的な段がさらに付設しているので，この部位が墳域にふくまれるか否かによって，いうまでもなく本墳の規模は大きく異なってくる。そこで，仮りに「上段」，「下段」，「最下段」と呼称して記述すると，問題の最下段は，地山の削り出しによって形成され，あたかも上・下段の後円丘と同心円を描くかのように，先端から両くびれ部あたりまで認められる。最下段の一定の高まりを墳域外とすることに多少ためらいを感ずるのは，前半期古墳にみられる3段築成の前方後円墳についても最下段のみ地山削り出しによっている例があるからで，本例の墳端についても断定をさしひかえたいが，おそらく墳丘築成時に成形されたに違いないこの最下段を，墳丘の一部とすれば，本墳の全長は確実に100m以上になる。横穴式石室の開口部は下段にあって，最下段と異なり，上・下段には盛土がある。下段から上部に盛土された封土は，羨門左（西側）断面においてよく観察できたので，概要を報告して以後の調査の参考に供したい。挿図第2図を参照されたい。この切断位置は，石室軸線に直交した西側壁の直前の面にあたる。各層位関係とそれぞれの色調および土質については別記したとおりであるが，特に注目すべきことが二点ある。その一つは，羨門西側壁のS-2と表示した石が，後章において詳述する墓道肩口の地山線にのっていることで，この段に古墳築成の一画期があることである。残る一つは，再堆積流土の様相を示す軟らかい茶褐色土，第一層の，より下層の各層序とその土質についてで，いずれも硬度は強くよくしまっている。つまりそれは，明らかに墳丘盛土の一部を示しているし，封土が無計画に積まれたのではなく，水平堆積の方針にのっとりつきかためられたことを物語っ



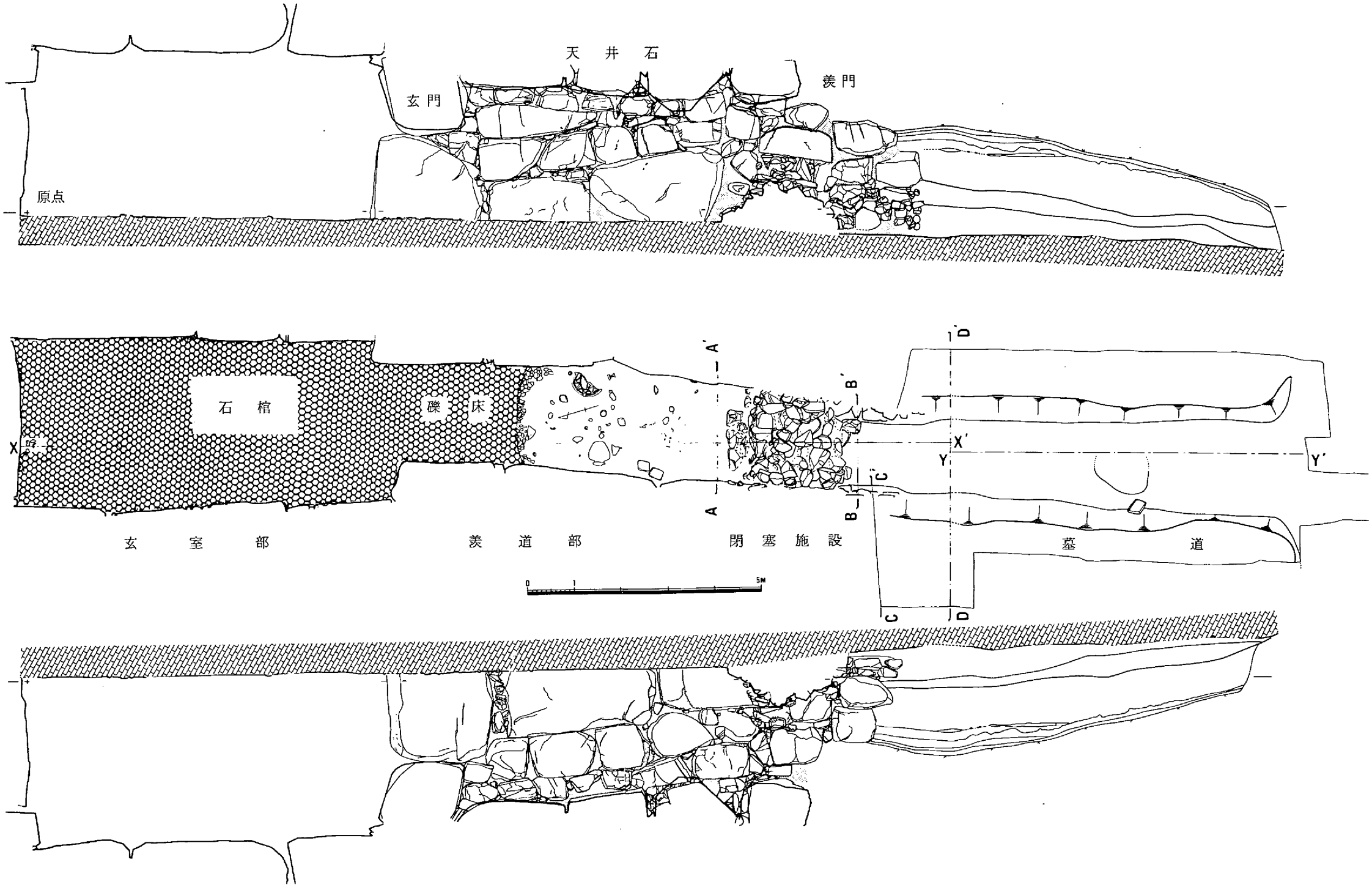
1　茶灰色土
2　黒灰色粗砂混入土
3　茶赤色中砂混入土
4　黒灰色粗砂混入土
5　黄茶粗砂
6　赤茶色粗砂
7　灰色粗砂
8　暗灰色粗砂
9　黄色粗色
10　赤褐色地山酷似層
11　同（赤色ブロック）
12　灰黒色土
13　暗灰黒色土
14　赤褐色土

挿図2　封丘盛土断面図

ている。しかしながら水平堆積層の各厚さは，後にふれる墓道内の粘土密封帯の厚と比較して，相対的に粗雑である。

第２節　羨道の構造と規模

石室の軸線はN－17°－Eをとる。いま仮りに開口部の方位を南として記述すれば，それぞれの側壁は，当然ながら西壁および東壁と表現できる。不思議なことに，この羨道の基底石は，両袖式の玄室へ持続する玄門部・および羨門部ともに，左右対称とならず不揃いである。その数値は，東壁長11.9 m，西壁長10.9 mを測り，東壁が約1 m長い。しかも，幅 2.1 m～ 2.3 mを測る羨道は，奥から入口にむけしだいに幅を減じつつ，西へふれて若干いびつな形態を呈する。西側壁は，基本的には花崗岩による3段積みであるが，東壁は途中から4段積みとなり，したがって天井石が少しばかり傾斜している。いずれにせよ両側壁は高さ1～2 mばかりの巨石を3枚ならべて据えつけ，そのうち，玄門基底石となる石は床面からの高さ約 1.8 mを測り直ちに天井石をうけている。2段めの石は基底石の $\frac{1}{2}$ 大から $\frac{1}{4}$ 大のものを利用していて，0.9 × 0.9 m大から 0.9 × 1.5 m大と各石の高さがほぼ一定しているために5～6枚並べて据えた2段めの石列線は上下端ともに基底石の形に規制をうけて，斜めに走行する。そして，西壁側はその上に3段めの各石を積み，その上端を水平にそろえるよう配慮しているのに対し，東壁はさらにもう2段積みあげて上端を揃えている。各石は，花崗岩の粗割り石で面取りがけっして丁寧ではないが，各石列間にはさらに小角礫を補填し，あるいは固い粘土をぬりこめるなどしてまったく空間をあます余地はない。現在，多少の隙間がみられる所も，かつてはしっかり粘土によるめばりがなされていたことを裏付けるかのように，剝脱して床面上に堆積した土はきわめて固くしまっていた。ただし，後述する閉塞施設より外側の両側壁は，閉塞施設以内のそれと対照的に粗雑な積み方を示すばかりか，この部位には天井石がない。現存する天井石は，玄門部の一枚を加えた合計5枚で，すべて現状を維持しているものと思われる。その理由の一つは，現状で，天井石の前端を占める石が閉塞施設と対応してその直上にあるという位置関係。次いで注目されるのは，その石の材質で，他の花崗岩と相違して青黒色の硬度の高いものを用いている点。さらに，閉塞施設から前の両側壁は，基底石に巨大な，安定感の強い石を使用することなく，閉塞石と区別しがたい程度の小礫を多用していることなどを，あげることができる。繰りかえしいうと，石室内の側壁は数トンまたは10数トンをはるかにこえる巨大な天井石を支えるよう堅固な側壁の構造になっているのにくらべ，閉塞石より前の側壁は上からの重量を維持できるような構築にはなっていないのである。ところで，床面から天井石までの高さは 2.4 ～ 2.8 mを測り，玄門の天井石は一段低い位置にあってその高さ 1.8 ～ 1.9 mである。玄室に入ると，ふたたび高くなって約 3.5 mとなる。ちなみに玄室の天井石は巨岩3枚からなっている。羨道のこうした石室の石材はすべて花崗岩で，しかも天井石，両側石の表面には，かならずしも遺存度が良好とはいえないが，塗布された赤色顔料の一部を各所にとどめている。のちにふれるように伴出した須恵器の最古のものが6世紀中葉をそれほど遡らない年代観を示すことからすれば，そして九州の古式に属す石室に朱塗りの例

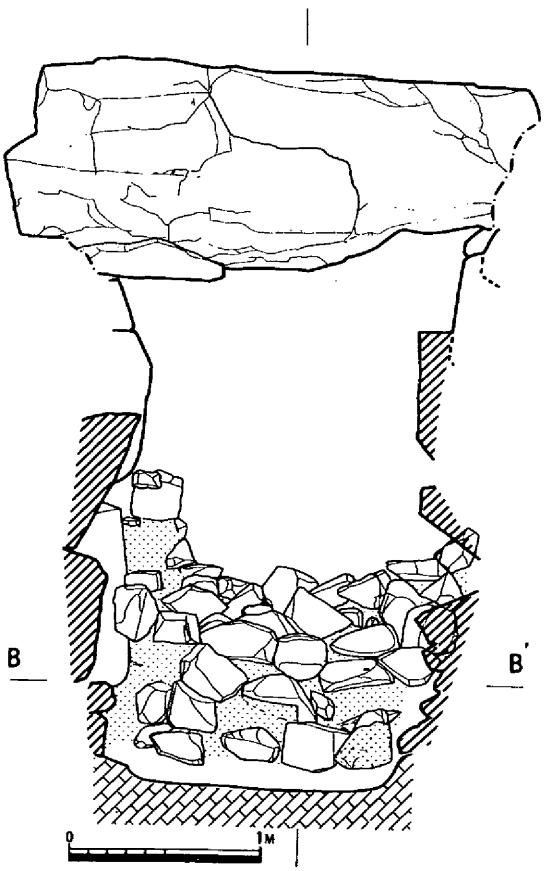


挿図3　石室 平・断面図

が多いことを想起すると，本墳は，石室構築に対する伝統的な技術を継承しているといえそうである。また，床面についていえば，玄門から入口方向へ約 3.5 mまで，玄室床面がそうであるように，拳大の円礫がぎっしり敷かれ，その前端にはとくに角礫が目立つ。そこから前約 4 mの床面は，単なる土床で，当初から円礫を敷きつめた状況をとらえることができない。同一の羨道床面でありながら，こうした対照性は，埋葬可能な空間的位置とそうでない場所との差を，如実に反映したものと考えられ，この機能的な差は，遺物の出土状況にもまた，よく表われている。つまり，土床の部分においてはまったく埋葬施設をものがたる遺構がなく，そのうえ，原位置を保つと判断できる遺物は甕・杯・高杯の須恵器 3 点，および礫床と土床との境の土床部分から検出された鉄滓 1 を数えるにすぎないのである。

第3節　閉　塞　施　設

玄門から前へ約 7.5 m，逆に入口から奥へ 1.5 mを測る，その間 2.5 mに，いわゆる閉塞施設がある。はじめに，この部位における羨道部側壁について記すと，少くなくとも東壁では，玄門から並ぶ巨石の基底石がとぎれ，あえて表現すれば，土壁に変化する。それほど極端に，側壁石が小型化し，わずかにのぞいている側壁石の一つを，堅い粘土がおおっているのである。西壁についても，基底石を観察できないが，2 段目から上部の石積は東壁とほとんど同様，相対的に小さく積み方も粗くなる。閉塞石は，ひとかかえもある角礫を無数に積みあげ，幅 2 m強の羨道幅いっぱいを遮蔽している。角礫の大きさは10×20cm大から40×55cm大で，平均30×30cm，厚さ20cm程度のものが多い。外見上，各石は無秩序に積まれたようにみえるが，けっしてそうではなく，石室軸線上に，直交する方位を意図して積んだことは，各石段の端部が，かなり整然と並んでいる点にあらわれている。しかも，角礫間にできる隙間には，灰色または暗褐色の粘土を充填するなどして，厳重に，密封した様子を窺うこともできる。石室の床面は，この閉塞施設のある付近から，かなり前

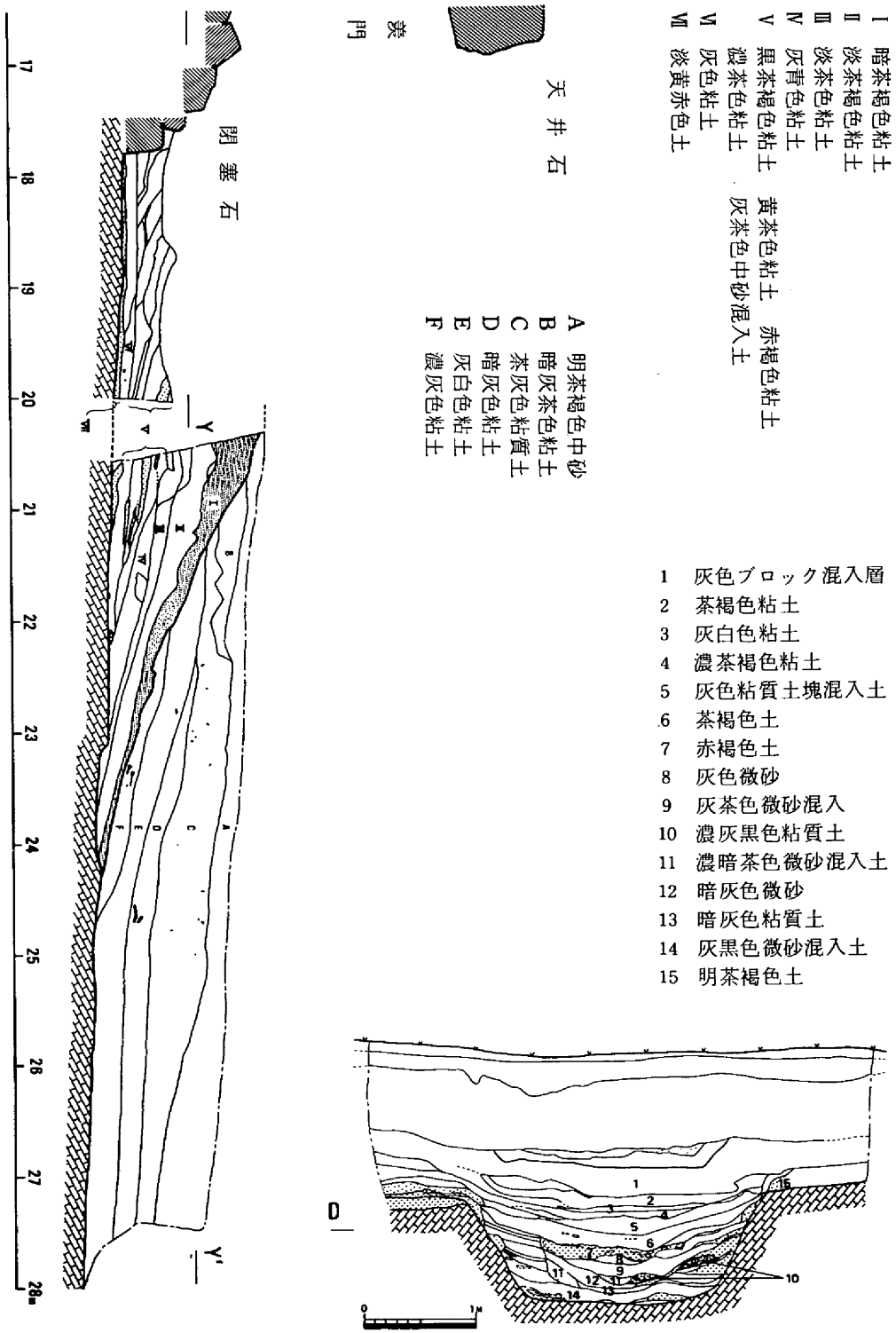


挿図 4　閉塞施設

方へ傾斜するが，それはこの施設を構築するための下部の構造と無関係ではなさそうである。閉塞施設の構築の仕方については，保存対策を考慮して完掘していないので断言できないが，最下の閉塞石は，地山を掘りこんで埋めこむのではなく，床面全体を若干掘りこみ，まず地山上面に粘質の強い灰色微砂混入土を20cmばかりの厚さに敷きつめ，その後，その粘土床の上に，一段目の石をのせて固定したらしい。このことは閉塞施設前面において，床上面と閉塞最下石との間に一定度の粘土層が観察できる事実から類推できる。おそらく1段6列または7列の石列を構成して，各石の間隙に粘土をつめ，同様の作業を順次繰り返して，ついには石室を完全に封じたのであろう。現状では，閉鎖石の残存高は石室の高さの半分に満たない1～1.5 mで石積み5～6段を看取できるにすぎない。しかしながら，角礫と粘土とが一体になってつくられたこの閉塞施設は，別項においてふれるとおり，本来，床面から天井部にまで達していたものと考えてよい。

第4節　墓　　道

石室の石材がとぎれた前面には墓道が接続して，直線的にのびている。この施設は，赤黄色花崗岩風化土の地山層を切開して，断面u字型に形成したもので，羨道幅よりやや広い肩幅をもち羨道入口から長さ8～9 mにおよぶ。墓道の肩部は赤褐色でやや硬度が弱い。そこから約20～30cm下のあたりから黄色に色調が変化して硬度を増す。上部はあるいは風化の進度と関係するのではないかと思われる。幅は上端で2.5～2.7 m，下底部で1.4～2.0 mを測り，やや外びらきしつつ，墳丘盛土と接して終る。底面はおよそ3～5度外方へ傾斜している。この墓道内においては，一見，版築層をおもわせる粘土帯が互層になって観察でき，その範囲は閉塞施設の前端から約6 m（原点から24.2 m）前方までである。閉塞施設の，角礫と不可分の関係にあった粘土が墓道内に密封粘土帯としてひろがり，石室を完全に封じていたようである。石室先端から外へ50cm付近の軸線に直交した断面で土層関係を観察すると次のようになる。中央部においては，大きくは9層小さくは14層に分層でき各層の厚さは平均10cmで灰色を基調としてその濃淡や，粒子の差によって分層可能であり，間層として濃暗茶色微砂混入層や赤褐色の地山酷似層もみられる。いずれも均質で固い。両肩口にみられる灰白色微砂混入土はことのほか固く，2次移動させるとその場でしっかり固着する。あるいはこの土は墓道肩口の一部または全部をおおう化粧土かとも推察される。こうした土層関係を，軸線と平行した断面で観察するとさらに粘土密封帯の傾斜度が看取できる。挿図第5図を参照されたい。A層は，暗茶褐色中砂層が堆積していて軟らかい。B層は，暗灰茶色粘土で後世人為的に，一定度掘り込まれたのち再び土砂が堆積した様相を窺わせる。C層は，茶灰色粘土で須恵器，土師器などの小片が混入した墳丘の流土として理解できる。D層は，暗灰色粘土で黒色の光沢をした室町期の瓦が同一層に包まれている。この層までは相対的に軟らかい土層が堆積していたのにくらべ，つぎのE層以下の各層は非常に固い。E層は，灰白色粘土により形成され，厚さ約20～30cmの均等な層で混入物が少なく，夕闇がせまると白色に浮きたってみえる。前端は墓道地山面と密着し，頭部はC層によって切られている。この層はおそらく墳丘盛土や，以下にふれる墓道を封じるために用いられた粘土塊の一部が，早い時期に流



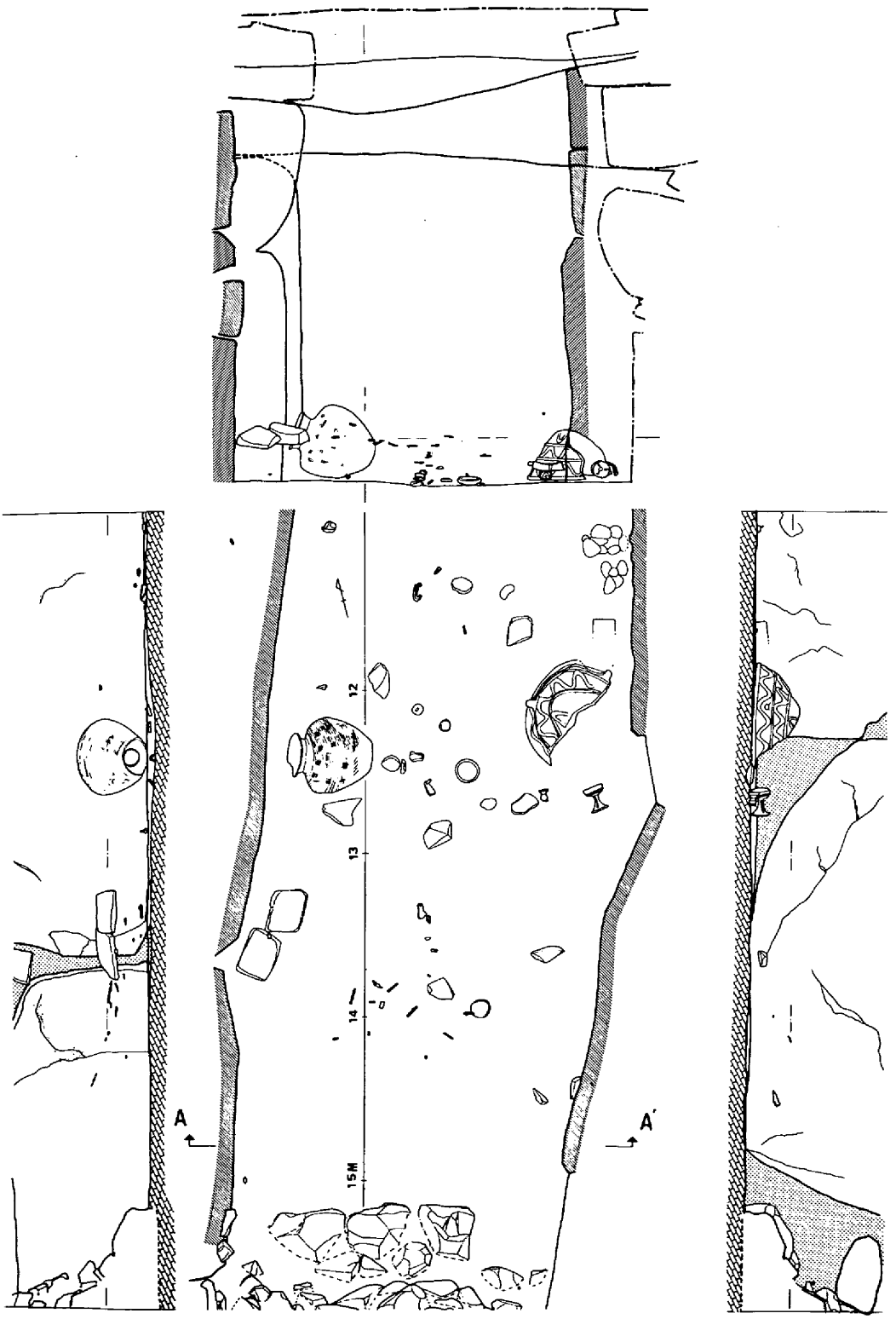
挿図 5　墓道内密封粘土帯

れて２次堆積をしたのではないかと思われる。F層は，厚さ約10～20cmの濃灰色粘土で，尾部は墓道底面に接し15度前後の角度をもって斜め堆積している。その範囲は僅かに 2.5 mばかりである。特に注目されるのは，須恵器が小範囲に一括しておしつぶされた状況で検出されたことである。須恵器の器種は杯１，高杯１，提瓶２である。いずれも６世紀後葉の時期と断定できる。この層の下位にあたる粘土帯は，前端にちかづくにつれ傾斜して下がる。逆にいえば，地山と粘土帯が密着するところの石室先端より約６ｍ（原点から２4.2 ｍ）付近を起点となし，約20度の傾斜角をもって石室の方向へせりあがっているのである。この角度に注意して，粘土帯上面を復原延長すると，それはちょうど閉塞石を包括して天井石前端に達していたものと思われる。

第３章　出土遺物各説

第１節　遺物の出土状況

遺物は出土地点によって，羨道部の内外に二大別でき，それぞれにまた，不動のものと２次的に移動したものとに区分できる。まず，羨道内遺物の出土状況は，挿図第６図に示したとおりである。遺物が不動のものか２次移動したものか識別する指標は，複数の床面を確認するための作業が発掘途上で検証されなければならない。角礫が見つかれば棺台に使用されたものかどうかを確かめ，鉄釘にあたれば，木棺をとめた残欠ではないかと疑い，その周囲を入念に調査したが，特に棺痕跡を検出することはできなかったし，また重層的に床面を確認することもできなかった。したがって，後述する若干の遺物を除き，ほとんどの遺物は２次移動したものと考えてよい。今回の調査範囲での床面は，礫床がとぎれ，ただ単に土を敷きつめた床面で床面上に接して検出された遺物は，須恵器甕・完形杯・高杯の３点と鉄滓１点のみである。これら３点の須恵器は玄門から前約５ｍ（原点から１2.5 ｍ）付近に，軸線と直交方位をとって並んでいる。ちょうど礫床のとぎれるところから前へ約 1.5 mの位置にあたる。この配列については，一定の意味があるように思われる。つまり，閉塞施設が，現世と黄泉の世界とを隔絶するための第１次線とすれば，須恵器の配された直線的なラインが，石室内における葬送儀礼を行う限界線で，土床と礫床との差は埋葬可能な部位とそうでない部分の厳然とした機能差を反映していると考えられる。そのために，今回の調査で発見された遺物はほとんど床面に密着した状況で把握することができなかったのであろう。羨道部の外で発見され，石室の機能した時期と軌を一にする遺物はほとんどすべて須恵器である。そこで注目される遺物は，挿図第５図で示した粘土密封帯の，上層にあるF層から出土した一括須恵器で，それは提瓶２，杯１，高杯１を数える。他の多くの器種は流土に混入して見つかったもので，図上復原したところ，大型器台，甕，大甕などが目立ち巨石墳の埋葬に似つかわしい葬送儀礼のあったことを暗示していて興味深い。



挿図6　遺物出土状態　平・断面図

第２節　須恵器および陶棺

須恵器甕（第１図－１）　床面に接して出土した甕で，口縁部を一部欠損しているがほぼ完形品である。色調は内外面ともに灰黒色で焼成良好。胎土に石英，長石を含む。器高５0.5 cm，口縁径２5.5 cm，頸部径21cm，肩部が強く張り胴部最大径は胴部上半にあって47cmを測り，底部は丸底になっている。外表は，細かな平行叩き目の原体でたたきしめ，ついで横位のハケ目をていねいに施しているが，底部付近のハケ目は斜めに走行している。内面は，同心円文が頸部直下から底部全面に及んでいる。頸部直下と底部を除き，胴部の大半にみられる「あて道具原体」の動きは，顕著な粘土紐接合部にそって，規則正しくしかも原体は比較的小さい。頸部から口縁部にかけてはナデ仕上げになっている。口唇部は折り返しで胴部の器壁は均一に５mm程度と薄く，底部がやや厚く８mmを測る。また，口縁部から肩部にかけて，自然釉の剝落痕がいっぱいにひろがり，その部分は灰白色または帯黄茶色を呈している。底部にも，焼き台または重ね焼き痕跡があって部分的に黒紫色に色調の変化を生じている。

須恵器子持壷加飾部（第１図－２）　床面上で検出されたとはいえ，移動した遺物である。本体の器形が壷であるか否かも定かでないが，通常，その肩口に加飾された小型の甕の一つが剝離したものである。色調は，外表暗褐色，内面黒色で，器壁断面は黒灰色をおびている。胎土に１mm以下の長石がまれに混入している。小さい胴部に外へ大きく張った口縁をのせたこの器高は，約 6.5 cm，口径８cm，頸部径３cm，胴部最大径 4.3 cmで，底部を欠損している。器壁の厚さは６mmぐらいである。胴部の内外表面にヘラ削り痕があり，胴部から口縁部に移る内側には絞りめが明瞭に残され，口縁部の内外表面は，ともにナデ仕上げである。

須恵器杯身（第１図－３）　床面に接して出土した完形品。色調は内外面いずれも暗灰色で焼成は良好でありながら器形がややひずみをもつ。胎土に１mm以下の石英・長石粒を含み，器高は 4.1 cm，口径１2.5 cm，受部径１4.7 cmを測る。受部は上外方へわずかにのび，口唇の立ちあがりは内傾して端部を丸くおさめている。底部はヘラ削り，体部はヨコナデ仕上げで，ロクロ回転は順まわりである。

以上のような形態と製作手法は「陶邑」でいうⅡ期（６世紀前半～７世紀前半）に属することは明らかで，器体がやや扁平であるから６世紀前葉まで遡ることはない。陶邑ＴＫ43，あるいはＴＫ 209に近い時期，西暦でいえば６世紀中葉というよりも後半と表現したほうが適切であろう（註－７）。

須恵器杯身（第１図－４）　羨道内床面から10cmばかり高い位置で検出された須恵器杯身破片で全体の約 $1/6$ が残存する。口径は 8.6 cmと小さく，受部径１0.5 cm，推定器高 2.5 cm程度であり，受部は上外方へのび，口唇立ちあがりは内傾して丸い。器体表面はヨコナデ仕上げである。焼成は良好で，色調は内表灰色，外表淡赤褐色をおびた灰色，断面は灰色。素地には 0.5 mm以下の石英・長石粒を含み，点々と３mm大の粗砂も含む。ロクロ回転は順回りである。なお，口縁端部に油煙かと思われる黒い光沢をした付着物がみられる。このような諸特徴をもち，ことに口縁

端部が，身から蓋へと逆転する直前の形態をしているので，陶邑でいうⅡ期最終末にあたるといえよう。7世紀初頭に比定しうるであろう。

須恵器高杯（第1図－5）　羨道床面に密着して出土した長脚一段透しのこの高杯は完形品である。色調は灰黒色で素地に1mm大の長石・石英を含み，焼成は良好である。全器高は16cmで，杯部の高さ4.5cm，杯部口径12.6cmである。それに裾部の張った筒状の脚がつく。杯部の底部と体部を分ける稜線はややあまく，底部から体部への立ちあがりはわずかに外反して口縁部を丸くおさめている。杯底部には疑似波状文とでもいうべき施文がある。櫛状工具の動きが部分的に非連続なため同工具によってできた刺突文の個所がみられるからである。脚部は，長方形の1段3方透しで，脚部を1本または2本の沈線で3段に分け，中段と下段に粗い波状文が施されている。脚端部は，折りかえしや肥厚することなく，裾部から自然に連続して丸く仕上げている。

以上の諸特徴から陶邑のⅡ期にあたることは誤りない。MT－15より新しく，長脚二段のTK－43より古い時期を占めることに問題はない。したがって，TK－10と平行か，あるいはTK－10とTK－13の間に位置する年代観を与えることができる。すると，6世紀中葉以降を示すものといえよう。

須恵器提瓶（第1図－6）　墓道内の密封粘土帯の上層から一括出土した破片を接合したもので，口縁部から体部若干までを復原しえる。色調は内外表ともに淡青灰色で焼成・胎土とも良好。全体的に器形は小さく，推定器高16cmで，体部背面のふくらみも少ない。口縁部は内弯して漏斗状をなし，二つの耳は退化してやや不均衡に，装飾的につけられている。口縁内面はヨコナデ，体部外表はカキ目調整を施し，その工具のあたった痕が数箇所ある。提瓶の小型化の傾向が，陶邑TK－43以降であるとの指摘は大切である。

須恵器提瓶（第1図－7）　前記の提瓶と出土地点が同一で，体部1/3をとどめている。口縁部・耳などを欠損しているが，体部の成形や大きさは前記のものと類似している。色調が灰色である点のみ異なる。

須恵器蓋杯（第2図－1）　墓道密封粘土帯の上層から出土。口径14.2cm，器高4.3cm，天井部と口縁部を峻別する稜線はなく，天井部にヘラ削り痕，器体の内外にヨコナデをのこす。色調は青灰色。ロクロ回転順回り。陶邑TK43の時期には天井部と口縁部との境界がまだ存在するから，むしろ本例はTK209の時期にあたる。年代は6世紀最終末を指す。

須恵器高杯（第2図－2）　墓道密封粘土帯の上層から検出。口縁端部と脚部下半を欠損。色調は明青灰色。ロクロ順回り。杯の底部から体部へ移る部位に，あまい沈線を入れ，稜をなす。おそらく長脚二段透しの脚部がつくものと思われる。

これまでやや詳述してきた須恵器は，羨道内または墓道内の一括遺物であり，以下の遺物は，墳丘流土中からの検出遺物であるので，できるだけまとめて概要を記したい。

杯（第2図－3・4）　3は残存度1/3。色調は内が暗灰色，外が暗青灰色，器壁が赤褐色で，焼成良好。ロクロ回転順回り。口径10.5cm，器高3cm強。受部は外上方，立ちあがりは内傾して長くはない。陶邑TK－10と同時期であろう。4は1/8残存。色調内外とも暗青灰色。陶邑T

K 209と平行期か。

須恵器盌蓋（第2図－5）　羨道入口の流土最下層から出土。あるいは先述した一括資料の一部を占める可能性もある。端部内面にかえりのある蓋で，天井部に櫛状工具による刺突文のめぐるのが大きな特徴の一つである。口径10.7 cm，推定器高3cm程度で，ふつう中央に碁石状のつまみがつく。これとセットになる身は，一般的な杯よりかなり深くむしろ盌というべきでその器体中央にはしばしば蓋天井部と同様の施文がなされる。

類例は倉敷市王墓山古墳（註－8）にみられ，やや時期が下るとはいえ，同様の施文をもつ蓋杯が横見古墳（註－9）からも検出されている。天井部に施文される櫛状列点文は備中国内における施文の一特色であろうか。

高杯（第2図－6・7・8・9）　6はまず杯でなく高杯の可能性が強いためにそのように図化したが，別器種の蓋になるかもしれない。口径12cm。下端にヘラ削り痕がみえ上半はヨコナデ。ロクロ順回り。7は口縁端部と脚部を欠損している。杯部の底部と体部との境にわずかに稜をのこしている。たぶん長脚2段透しの時期のものであろう。8，9は脚端部で，底径に差があるが，ヨコナデ仕上げや端部のつくりなど類似している。長脚二段透しのものと思われる。

瓶（第2図－10・11・12・13）　10は最初直口小壺を思わせたが，石膏入れなど復原作業を進める過程で瓶と判断するにいたった。小円孔部は消失しているが，器体の上部にわずかながら二本の沈線を看取でき，口縁部は外上方へはって2段に屈曲するような，形態を想定させるからである。体部に対する頸部の比率は小さく頸部も短いので，次に紹介する瓶より，後出的なものであろう。11は，たまねぎ状の体部に強く上方へ外反した頸部がつづき，有段屈曲部をへて，やや内弯し，端部を丸くおさめた口縁がつく。体部に二本の沈線がめぐり，その間に小孔1と櫛状工具による刺突文が配される。頸部には，中央に1本，やや上位に2本の沈線を配し，その間に櫛状工具によってタテ位の直線文が加飾され，同じ施文で口縁部ちかくまで飾られる。12・13も別個体であるが，同一の手法によっている。こうした頸部の著しく外反した瓶は，陶邑では高杯脚部の長形化と無関係ではないとの重要な指摘があり，TK－10以降にみられ，おそらくTK－43，TK 209まで継続していて不思議はない。

本例のように，頸部が極端に紋られ，異状に細長い頸部へつづく形状は，吉備地方の特色であろうか。同様の形態の瓶が，倉敷市王墓山古墳，山陽町岩田14号墳（註－10）などに散見でき，旧国名の備前・備中を含む地域にみられる点は今後の追究課題であろう。

須恵器甕A類（第2図－14・15・16）　14は，口径25cm，ヨコナデ仕上げ。ロクロ回転右。色調は明灰色。口縁端部は若干折り返される。15・16も口縁折り返しという共通点がある。

須恵器甕B類（第2図－17）　口径はとれない。焼成良好，色調灰色，一部に黒色の釉がかかっている。口縁部下端が肥厚していて，口唇部がわずかに内傾する。

須恵器甕C類（第2図－18）　小片で口径不明。口縁端面に浅い沈線一条がめぐる。切断部の曲線から中型甕と推定したが，あるいは器台の口縁部とも思われる。

須恵器甕D類（第2図－30）　頸部から大きく外反する口縁部がつき，口唇部は短く立ちあ

がる。口径は65cmを測る大甕。頸部に浅い段を有し，口縁部にも1段2条の浅い沈線が2段施され，その間は，ヘラ描き斜線文によってうめられている。器体外表面は，その叩き目から粗い平行の溝をもつ叩き原体で，内側は同心円あて道具によって成形されたことがわかる。陶邑のTK217に同様の技法がある。7世紀代に入ることは確実である。

須恵器台付壺（第2図－19）　脚部 1/3 が残存。底径15cm，残存高7cm。焼成やや不良で黄褐色をおびる。脚上端に逆台形の透し孔が切られている。6世紀後半に一般的な器形である。

須恵器器台a類（第2図－21）　径約43cmを測る器台の受部である。口縁端部は丸い。外表下半はカキ目ヘラ削りののち，ヘラで粘土表面を調整した跡をとどめ，外表上半および内表はヨコナデ仕上げである。ロクロ順回り。

須恵器器台b類（第2図－22）　器台の受部の断片で，他の器台および器台片と色調・胎土が異なるために個体差を区別したにすぎず，むろん，型式差を示すものではない。色調は灰色で胎土に1mm以下の石英・長石を含む。外表面に9条1単位の櫛描き波状文がめぐり，これをはさむ上方・下方にそれぞれ2本の沈線が刻まれている。

須恵器器台c類（第2図－23～29）　色調と胎土がきわめて近似しているので，同一個体と判断でき，器壁厚や傾きから，およそ図示した順序で上端から下方へ向かうものと思われるが，接合点はない。色調は内面暗青灰色，外面暗灰色で，素地に2mm以下の石英・長石がめだつ。受部外表は，櫛描き波状文・沈線・列点文などで飾られている。28・29は脚の透し孔と断定できるヘラ切り痕がある。方形孔であろう。

なお20は器台の脚端部と思われ，底径22cmを測るが，上記いずれのものと伴うのか明らかでない。

土師質陶棺蓋（第3図）　亀甲型陶棺の蓋部約 1/5 の断片で例をみないほど突帯や櫛目および円孔などによって加飾されている。平面形は隅丸方形の形状を呈し，棺身に接する部位の幅は60cm，残存長は一方が約45cm，他方が30cm。端部から徐々に弧を描いて天井部に至り，天井部までの高さは32cmを測る。外表には，中央のやや窪んだ断面台形の突帯三本を，底面と平行してはぼ等間隔に張りつけ，この突帯によって区分された部位に，別の突帯を波状文風にはりつけ装飾効果を高めている。いわゆる縄掛状突起は軸線にそって1本，両脇の不均衡な位置に突起1と突起の欠落した差し込み孔1がある。その位置は，最下段にあり，突起は厚さ約25cmで，器体から外下方へ約10cm程度突出していて，より新しい装飾的なものと異なり，古い要素をのこしている。

突帯によって分けられた中段には，左右対称に径1cm強の小円孔が穿たれている。また，中段の波状突帯から上部には，各突帯にそって粗い櫛目文が施されているが，天井部でのそれは不規則に切りあっている。櫛目の1単位は，工具原体の幅および櫛目の間隔により3種みられる。突帯を接合しやすくすると同時に文様の一つとして施されたのであろう。色調は，丹塗りしたかと思えるほどの赤褐色を内外表面ともに呈している。胎土には3～4mmの粗砂を一部ふくみ，1mm以下の石英・長石粒がもっとも多い。粘土紐8段を積んで形成し，内面ヘラ削り，外表面ナデ調整をおこなっている。棺身との接合部は切断法をつかっていないようである。全体として堅く焼

きあがっているが若干の焼成差もある。同一個体の破片に黒斑のみられる点も注目される。以上から相対的な年代を推しはかるとすれば，各突帯断面がかならずしも鋭角的でないとはいえ，なお台形を志向している点，縄掛状突起が少なくとも装飾化することなく，差しこみ孔から突出して外下向へのびている点など比較的古い要素がみられるのである。おそらく6世紀後半を下ることはないであろう。

第3節　武具・馬具・装身具

環頭大刀（第4図－1）　閉塞施設に接した奥，羨道東壁に密着し，床面から約1mも高い位置に浮離して発見された。いまなお全体に薄い粘土の被膜がある。本図は，レントゲン写真にもとづき，被膜の処理以前に実測して製図したものであるから，計数値に多少の誤差，測点の修正などを考慮する必要があることをあらかじめおことわりしておきたい。刀身部を欠損しているが，環頭部の保存状態は比較的良好で，全体に青緑銹がふいているとはいえ，楕円形の環体は長径6cm，短径4.5cmで，青銅の地金の上に金箔を張りつけている様子がわかる。環円中央に側方向きの単鳳頭首が透彫され，頸部および冠部の2個所を環体と接合して固定させている。単鳳とした理由は，玉を噛んでいないうえ，歯もむき出していないし，なにより口を閉じているからに他ならない。環体にも確実に彫刻があるが，いまその図柄について蛇腹か植物文かを鮮明によみとることはできない。また，環体の下方約1cmのところに直径3mmの目釘孔1がある。本例に近似した単鳳環式柄頭は，香川県鑵子塚例，京都府岡1号古墳例などにみられるが，最も酷似したものは奈良県岡峯古墳出土例であろう（註－11）。これら類例は，新谷武夫氏の研究によると（註－12），6世紀中葉，西暦550年の直前に位置づけられている。

大刀（第4図－2～5）　刀子残欠でないことは，どの断片にも刀部が認められず，かなり厚さがあることとあわせ，切断面からさらに幅をもつものと推定されるからであり，むしろ刀身の地金が縦長に剝離したものと推測される。表面は平滑でなく，稜線をともないいくぶん凹凸がみられる。2，3は，断面幅の狭い方に，刀部がないのに木質が，横位に残存しているので，柄部ではないかと思われる。図のような小鉄片が他にも数点ある。

馬具・方形留金具（第4図－6）　方形の座は一辺3.3cm，上辺2.8cmで厚さ3mmである。方形座の中央を，断面方形で頭部1×1cm大の釘状留金具が貫いている。方形座の裏面には皮状の被膜が残存し，釘部下半には木質が横位にのこされていて，もとは鞍に固定されていたことを示す。

馬具（第4図－7）　断面方形で，形態は不正楕円形を呈し，一隅がやや突出し，その部位に木質が付着している。その機能について速断しがたいが，頑強なつくりで重量にたえる部分に使用されたに違いなく，鐙金具の一部と推定しておきたい。

鉈状鉄器（第4図－8）　羨門と墓道との接続地点で，浮離して発見された遺物。当初，全体の形状や先端部のそりなどから大型の鉈と思われたが，錆とり作業の後，先端を観察したところ刃部および峰のない事実が明らかとなり，鉈ではなく，鉈に似た不明鉄器とする以外にない。

馬具・鞍金具a類（第4図－9・10）　ともに同巧同大の鉄地製の座金に7～8個の鋲をとどめ，9には座金天井部に革帯と結合させる止め金具が固着している。円形の座金径は約6㎝，天井部は一段高くその径約4.5㎝を測り，厚さは3㎜である。帯止め金具は小馬蹄形で，その円形軸部を板状金具によって挟みしっかり座金に固定させる。接合機能を果すこの板状金具は，座金内でふたたび屈折され両側に開き，座金裏面にそってとめられる。馬蹄形止め金具の中には，さらにT字形の舌が，帯孔をうけるよう，回転軸部を，止め金具両側にうめこんでいる。

馬具・鞍金具b類（第4図－11・12）　一本の断面方形の鉄を，上方を長方形に，下方を不整楕円形に仕あげ，上端中央に鉄製の回転軸棒と，それをはさんで止める金具がつく。止め金具の下部には木質が遺存し，鞍金具体部と木質痕の間には方形の座金残欠がある。木製の鞍橋につく鞍金具に相違ないが，先の鞍とは形態が異なり，時期差を示すのか，前輪と後輪の形態差であるのか，今後検討したい（註－13）。

鉄滓（第4図－13）　羨道部の礫床と土床との境付近の床面に接して検出。長径約9㎝，短径約8㎝，高さ約3㎝を測る不整形の鉄滓。発見後，表面の土砂をできるかぎりのぞき乾燥させて計測した重量は253.80gで，二昼夜恒温乾燥器の中に入れたのち取り出してただちに重量を計ると，第一回め245.1g，第二回め245.0gの数値を得た。横穴式石室に対する鉄滓の埋納は，県北の美作地方ではしばしば見られるが，県南では新発見でその意味するところは大きい（註－14）。

鉄鏃（第5図－1～18）　鉄鏃は合計18本を数える。すべて有茎式で，先端の「身」を損傷し「根」の断面は方形でいわゆる角根である。身が欠損しているとはいえ，身に接して直ちに「茎（なかご）」がつくのではなく，その中間部の「箆被（のかつ）ぎ」が長くのび，エラを張ったように「棘（きょく）」を有す。したがって，後藤守一氏の分類に従えば，「棘箆被（きょくのかつ）ぎ柳葉式」にふくまれるであろう（註－15）。1～10ではよく棘をとどめ，また1～11は茎に木質をのこしている。たとえば3では，軸線に平行した細い木目が縦位に走り，棘の下方1.3㎝の範囲に横位の木目を看取できる。おそらく鉄心の茎を竹管でおおい，棘および棘端を桜皮で接合させたのであろう。竹管の上端は6でみられるように，棘をおおう場合がむしろ普遍的なあり方であろう。

棺釘（第5図－19・20・27・28・30・31）　頭部におりかえしがあることをもって釘としたが，かならずしも明瞭でない。なお，釘の先端ではないかと思われる残欠もあるが，これまた鏃の茎の可能性もある。

鋲（第5図－22・29）　鋲は，二つの林木をつなぎ止める「コ」の字形の釘であるが，いずれも完形品でないから，釘・茎の曲折したものであるかもしれない。

不明鉄器（第5図－23・24・25）　先端が曲折する点に共通の特徴がある。馬具の一部とも思われるが，断定する積極的な根拠がない。

水晶製切小玉（第5図－下段1）　透明な6面体の切小玉で，長さ2.1㎝，胴径1.5㎝，上径・底径ともに7㎜で，中央の貫通孔は上径2.5㎜，下径1㎜を測る。

ガラス小玉（第5図－下段2）　ブルーのガラス小玉。水晶製切小玉の孔の中から発見され一部欠損している。径4㎜，高2㎜，中央孔の径1㎜である。

第4章　まとめにかえて

以上をもって小報をとじるにあたり，今回の調査で判明した特徴点を要約しておきたい。

石室の規模と構造

羨道部の排土作業を完了したことによって明らかになった石室全長は，東壁に沿って計測した場合19.7 mとなり，奈良・石舞台より約0.5 m長い。模式図をもって，他の巨石墳と比較すれば，挿図第7図にみられるとおり，本墳はゆがんだ羨道と低い玄門位置に特徴があり，また羨道部の床面が礫床部と土床部にわかれることなどにも他に類例の少ない特色の一つがみられる。さらに，幅約3 m，長さ9 mにわたる墓道が羨道の前面で検出されたこと，および羨道入口付近に堅固な閉塞施設がみられた点も特筆に値するであろう。そのうえさらに，この閉塞石と墓道とを，完全に密封した粘土帯が確認できたことも忘れられない。

祭礼の諸形態

祭礼の内容を適確に復原することはできないが，少なくとも二つの異なった祭式のあったことがわかる。まず墓道内の墳丘端部で「墓前祭」とでも称すべき祭がおこなわれた痕跡があり，一括して須恵器を取りあげることができた。また墓前祭には，各種の大甕が使われたらしく，図示しえなかった多数の甕胴部破片がみられた。

羨道内においては，その出土状況を記してきたように，礫床のとぎれた土床のうえに中程度の甕が横だおしの状態で検出されたが，埋葬する意識のないこの部位に存在する甕は供献の跡を示すのではなかろうか。

古墳築成の時期について

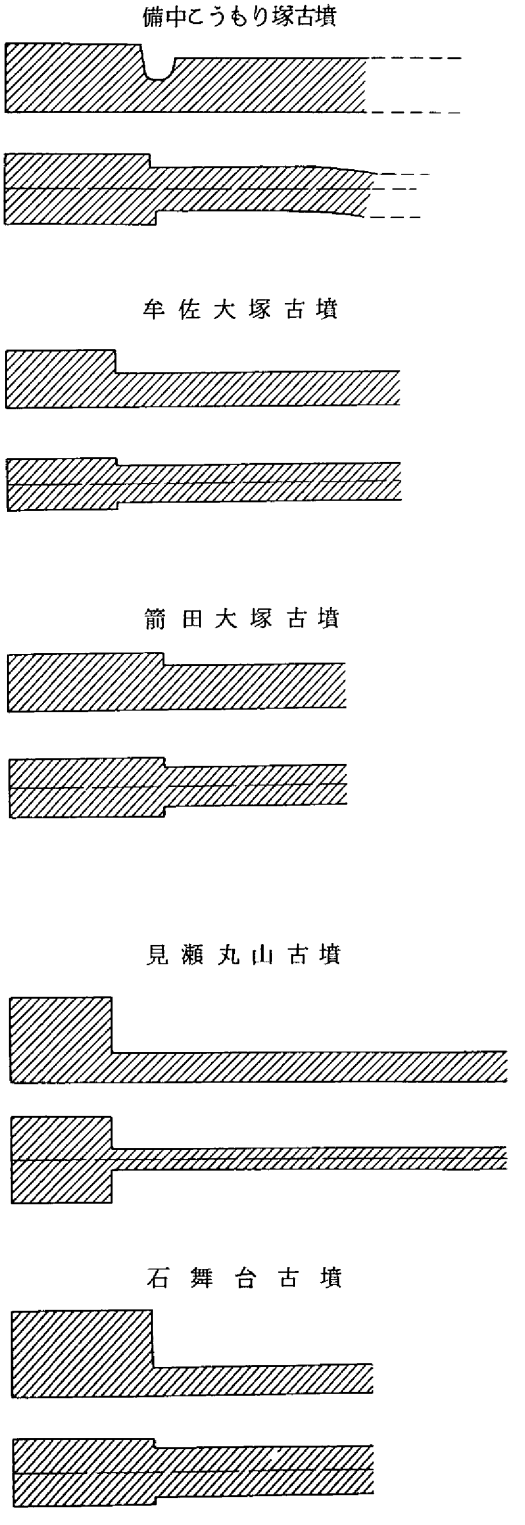
年代を示す尺度としての須恵器が羨道内で若干検出され，とくに高杯は，第3章第2節でふれたとおり長脚1段3方透しの時期にあたり，その中ではやや後出的な要素をもつことを指摘した。それは，受部の形態，および脚端部のつくり，粗い文様のつけ方に顕著な特徴がある。また，墓道の中に再堆積したいわゆる流土中から検出されたもっとも古い杯も上記高杯と同一時期と考えられるので，今回の調査によるかぎり，最古の埋葬が6世紀中葉以降を指すものと推定できた。そして，石室内でのもっとも新しい遺物は小型の杯で7世紀初葉を示しているから，少なくともこの段階までは追葬が行なわれたことを想定される。

被葬者の性格について

陶棺蓋片および棺釘などの出土が示すとおり，玄室内に安置された埋葬主体のほかに複数の埋葬主体が想定され，埋葬のあり方に関するかぎり一般的な横穴式石室と共通性のあることが，当初から予想されていたにせよ，実証できた。そして，遺物の数量にめぐまれなかったとはいえ，武具，馬具，装身具とほとんどの種類が確認でき，中でも，単鳳環式柄頭の出土が注目をあつめた。この環式柄頭は，家型石棺の被葬者がたずさえていたものか，亀甲型陶棺の被葬者が所持していたものか，いずれとも決しがたいが，町田章氏の見解に従えば，6世紀代で装飾のほどこされた環刀

は，軍事権の象徴として中央政権から地方政権へ分与された（註－16）のであるから，いずれかの被葬者が中央と強い連関をもっていたことは確実である。さらに，約240kgの鉄滓が出土した点も興味深い。すでに被葬者の中に，鉄の生産工程または流通機構の中で深いかかわりをもちはじめ，鉄に対する占有権を強めつつあった事実の反映としてとらえることができよう（註－17）。それが鉄斧とか鉄刀とかの普遍的な生産品ではなく，また生産工程で必要な生産用具としてのカナトコ・カナハシなどでもなく，製鉄の原料源を精製する過程で生じた鉄滓そのものである点がまず注目され，とくにまた，その埋納地点が墳丘上でなくして埋葬位置ときわめて近い石室内である事実によって，被葬者の鉄に対するなみなみならぬ関心を，うかがい知ることができる。さらに，浮離しながらほとんど同一個所で検出された鉄鏃は，総数18本を数え，消失・散逸したものを含めると，たぶん20本以上約30本に近い数値が一単位であった想定に導かれる。兵制に関するどの古文献をひもといても，弓または箭は，人毎に用意すべき具であるから，被葬者側において製作され，生前に提携していたものに違いない（註－18）。このように自から武装していた被葬者は，同時に中央から下賜された，環頭大刀やおそらく馬具の一部または全部をふくめ，強固に武装化していたのであり，巨石墳を頂点とした新たな支配関係が形成されていた事実を物語るであろう。

以上のべきたったように，本墳の築成時期は6世紀後半で6世紀中葉を大きく遡ることはなく，したがって本墳は，『古事記下巻』仁徳記に出る吉備黒媛の，墓とする一説があ



挿図7　石室模式図　S≒$\frac{1}{400}$

るにせよ，そのような伝承とはまったく無縁な古墳である（註－19）。年代的な矛盾と相まって，被葬者を女性と断定できる積極的な資料は皆無である。だからといって，本墳に対する歴史的価値づけがいささかなりとも減ずるわけではない。

（葛原克人）

註（１）　中田啓司「保存か顕彰か－『吉備路風土記の丘』批判－」（『考古学研究』第１７巻第４号　１９７１年
西川　宏「反動攻勢としての風土記の丘計画」（『歴史地理教育』１８９）　１９７１年
間壁葭子「吉備路風土記の丘」（『高梁川』２９）　１９７２年

（２）　高木市之助他監修「風土記」（『日本古典文学大系』２　岩波書店）　１９５８年

（３）　拙稿「古代吉備豪族の誕生」（『歴史手帖』第４巻第６号）　１９７６年

（４）　近藤義郎「『吉備路』借景」（『考古学研究』第１７巻第４号）　１９７１年
岡山大学考古学研究部『三須丘陵遺跡分布調査報告』　１９７６年
小野一臣氏による永年の分布調査成果が「岡山県遺跡台帳」に登載されている。

（５）　高橋　護「三輪山墳墓群の調査から」（『岡山県総合文化センター館報』No.３９）１９６３年
近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」（『考古学研究』第１３巻第３号）　１９６７年
孤塚省蔵「吉備型器台論」（上）・（下）（『異貌』四・五）　１９７６年
近藤義郎「古墳以前の墳丘墓」（『岡山大学法文学部学術紀要』第３７号）　１９７７年

（６）　西川　宏「岡山県造山古墳とその周辺の前半期古墳」（『古代学研究』第９０号）１９７１年

（７）　田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ　１９６６年　以後，須恵器の検討は本報告書に準拠することとした。

（８）　三木文雄「王墓山古墳の遺物」（『倉敷考古館研究集報』第１０号）　１９７４年

（９）　岡田　博他「横見古墳群および横見墳墓群の調査」（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第１５集）　１９７７年

（10）　神原英朗他「岩田古墳群」（『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』第６集）　１９７６年

（11）　小島俊次・河上邦彦「岡峯古墳」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第３３冊）１９７７年

（12）　新谷武夫「環状柄頭研究序説」（『考古論集』　松崎寿和先生退官記念事業会編）　１９７７年

（13）　小林行雄「鞍」（『考古学辞典』　創元社）　１９５９年

（14）　河本　清・山磨康平両氏のご教授による。

（15）　後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」（『日本古代文化研究』）　１９４２年

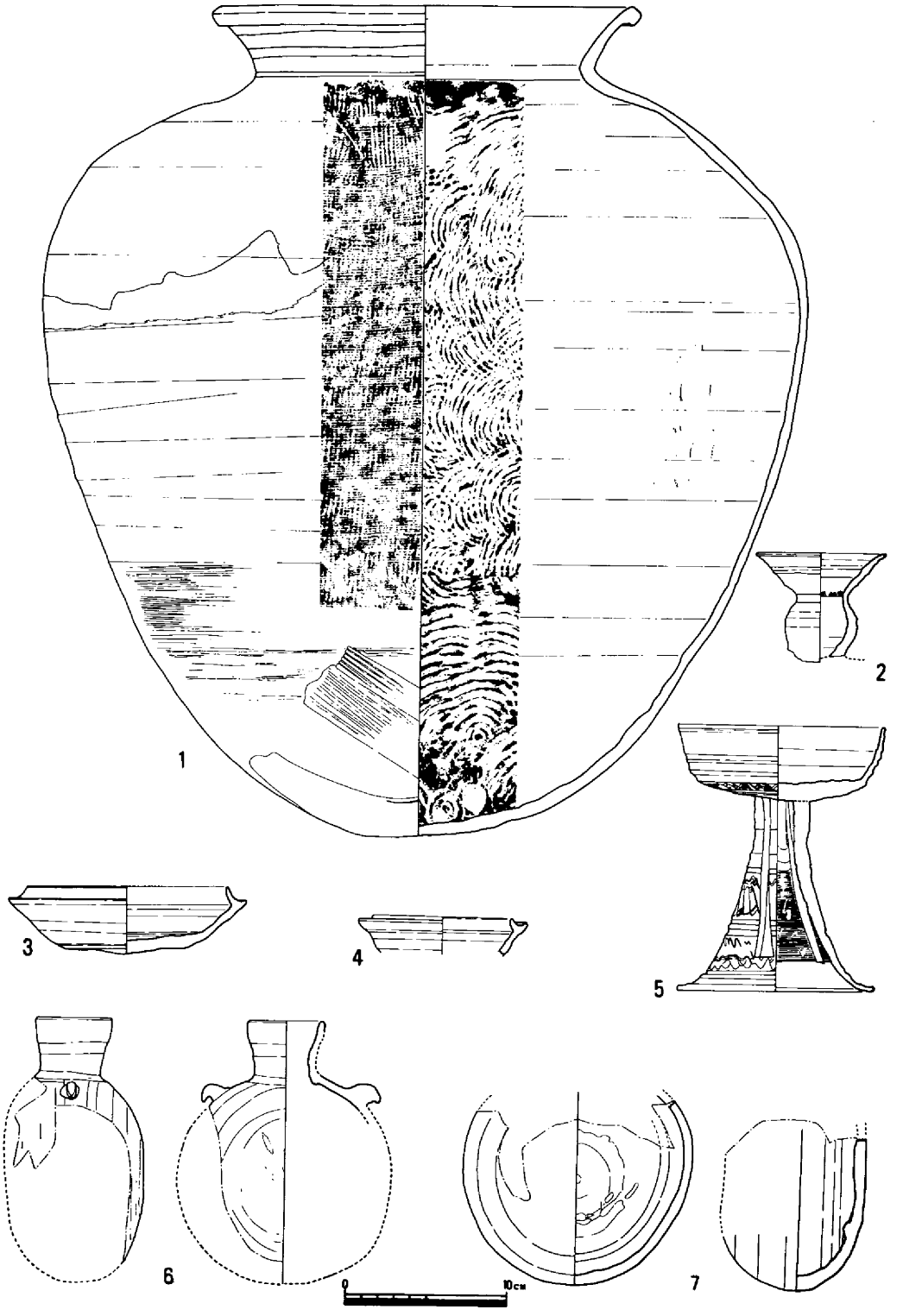
（16）　町田　章「環刀の系譜」（『奈良国立文化財研究所学報』第２８冊）　１９７６年
穴沢味光・馬目順一「東北地方の環頭大刀の諸問題」（『福島考古』第１９号）　１９７８年

（17）　今井堯・近藤義郎「群集墳の盛行」（『古代の日本』４　中国・四国編）　１９７０年

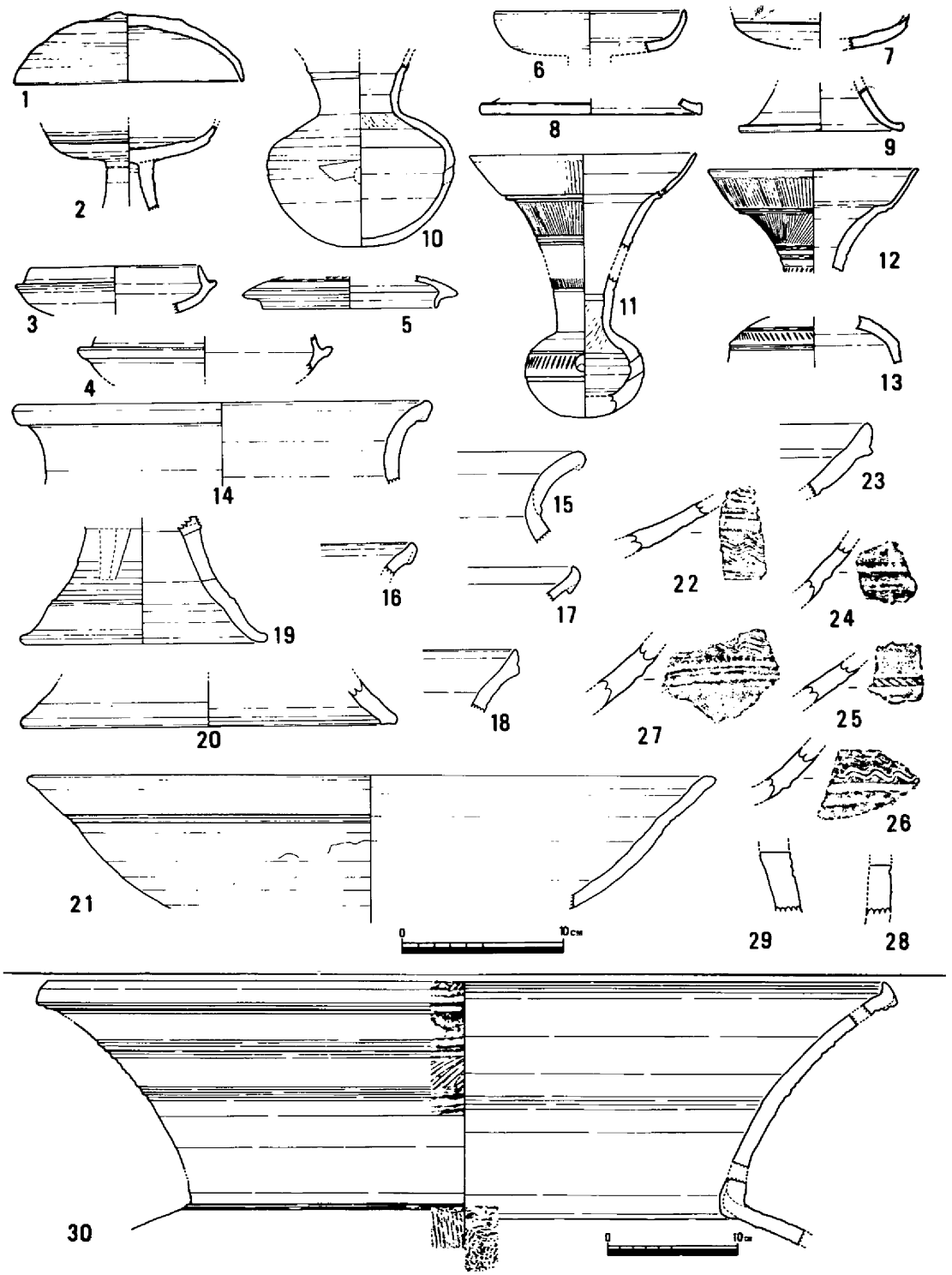
（18）　井上光貞他監修「律令」（『日本思想大系』３　岩波書店）　１９７６年

（19）　春成秀爾「こうもり塚と『黒媛塚』」（『考古学研究』第１８巻第３号）　１９７１年

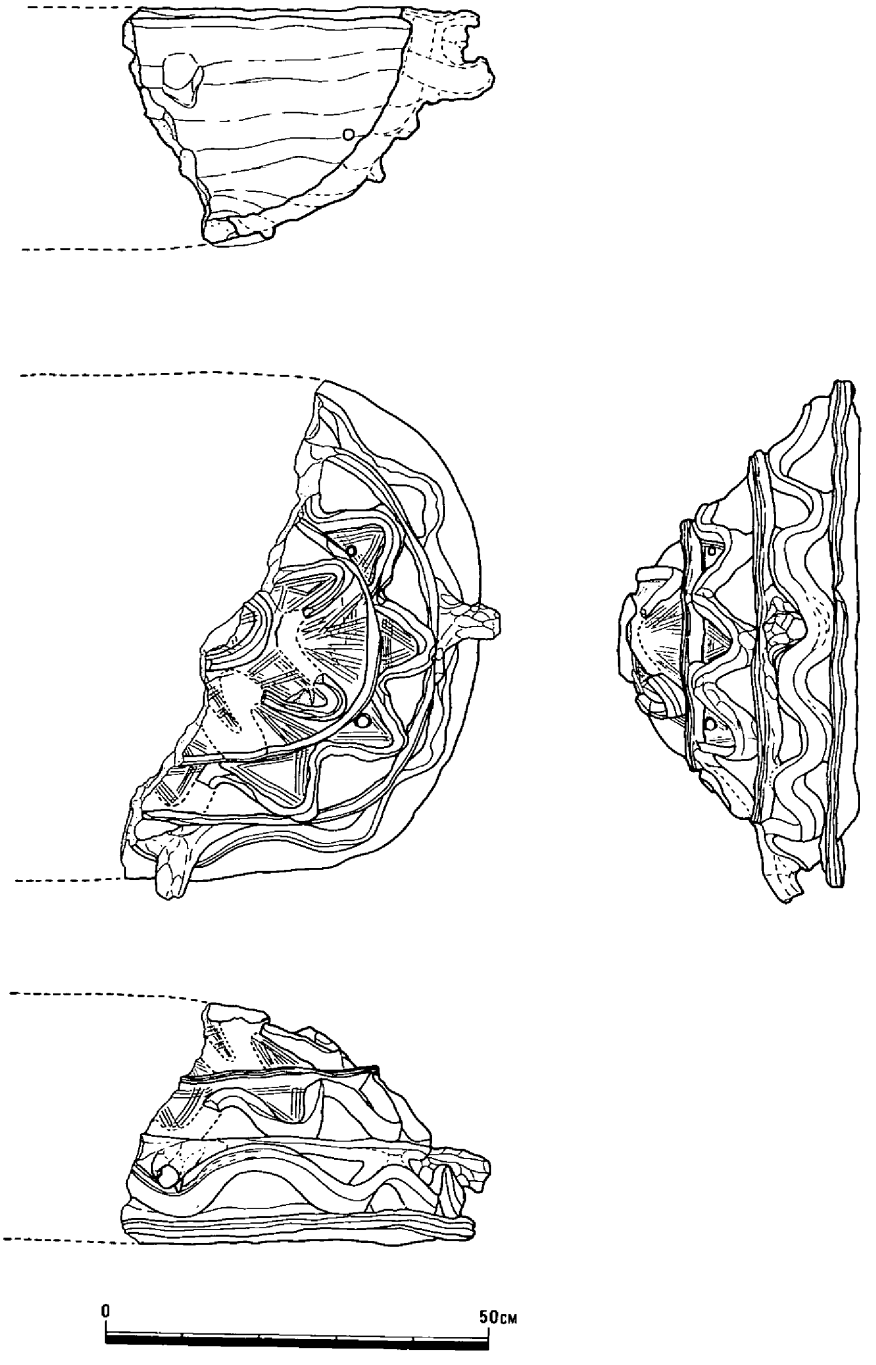
図　　版



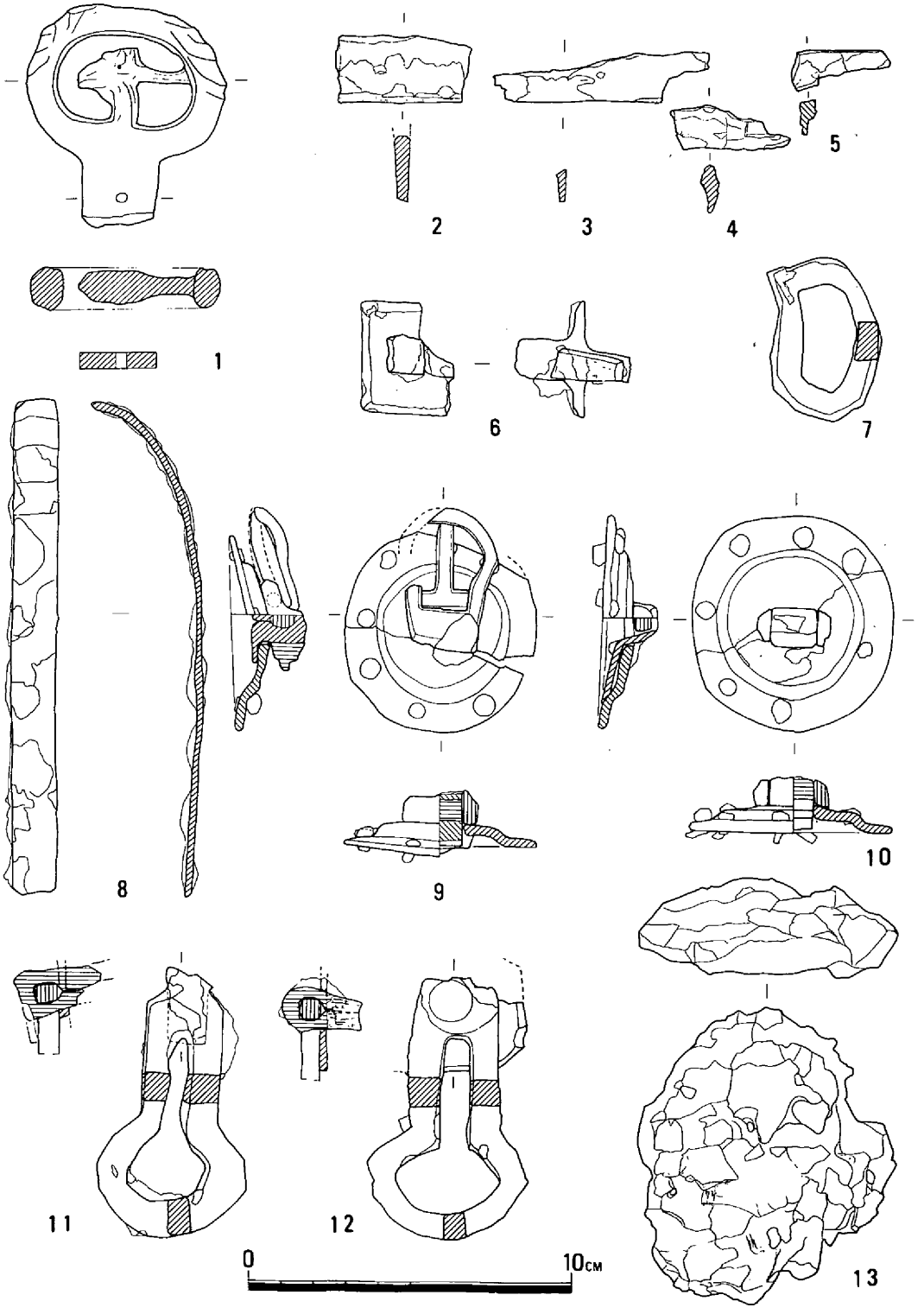
第１図　出土須恵器実測図（$\frac{1}{4}$）



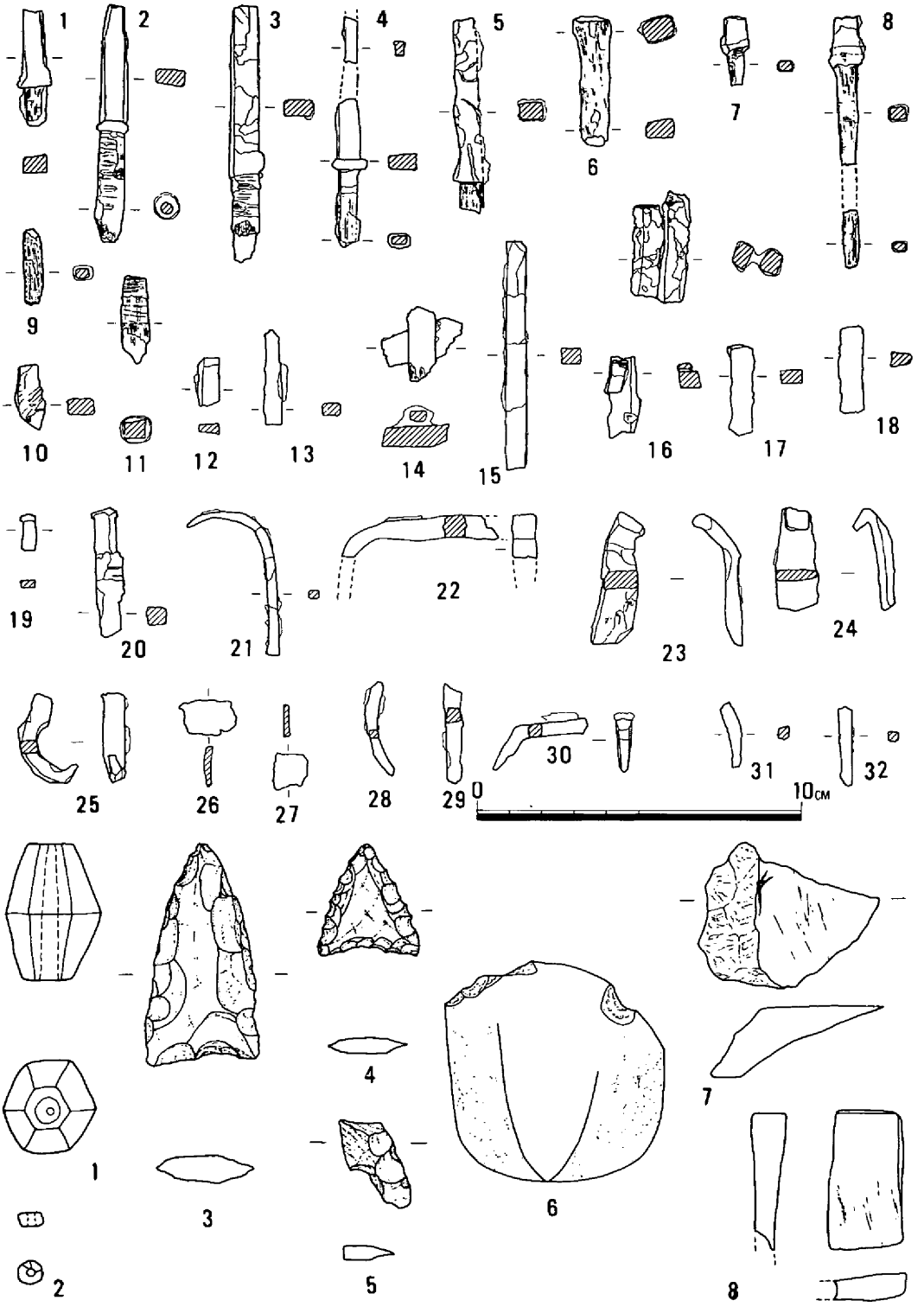
第２図　出土須恵器実測図　１～29（$\frac{1}{4}$）　30（$\frac{1}{5}$）



第 3 図　陶棺蓋実測図 $(\frac{1}{10})$

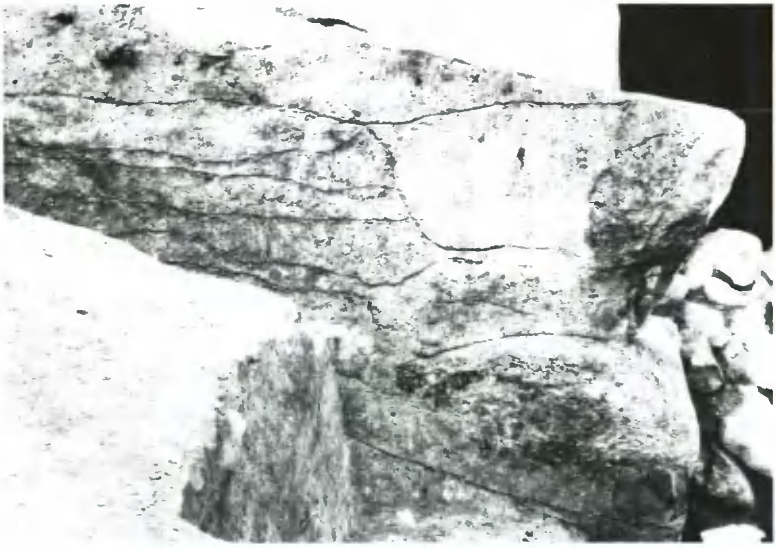


第４図　武具・馬具等実測図（$\frac{1}{2}$）



第５図　鏃・玉・その他実測図下段１・２・３・４・５原寸　他（$\frac{1}{2}$）

1－1　　羨　門　部（前面より）



1－2　　墳丘盛土断面（前面より）

図版 2

2－1　閉塞石及び墓道内充塡土（奥より）

2－2　墓道肩口（奥より）

2－3　墓道内一括須恵器

3－1　遺物出土状態（前面より）

3－2　遺物出土状態（奥より）

図版 4

4－1　遺物出土状態

4－2　鉄　滓

4－3　鞍

5 − 1

単鳳環式柄頭

5 − 2

水晶製切小玉

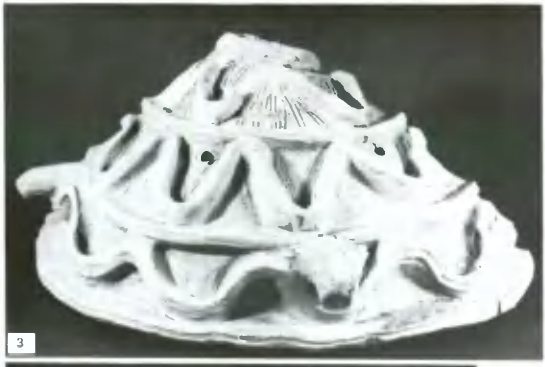
5 − 3

鉄　　鏃

5 − 4

須恵器高杯

図版 6



1－2

1－5

1－3

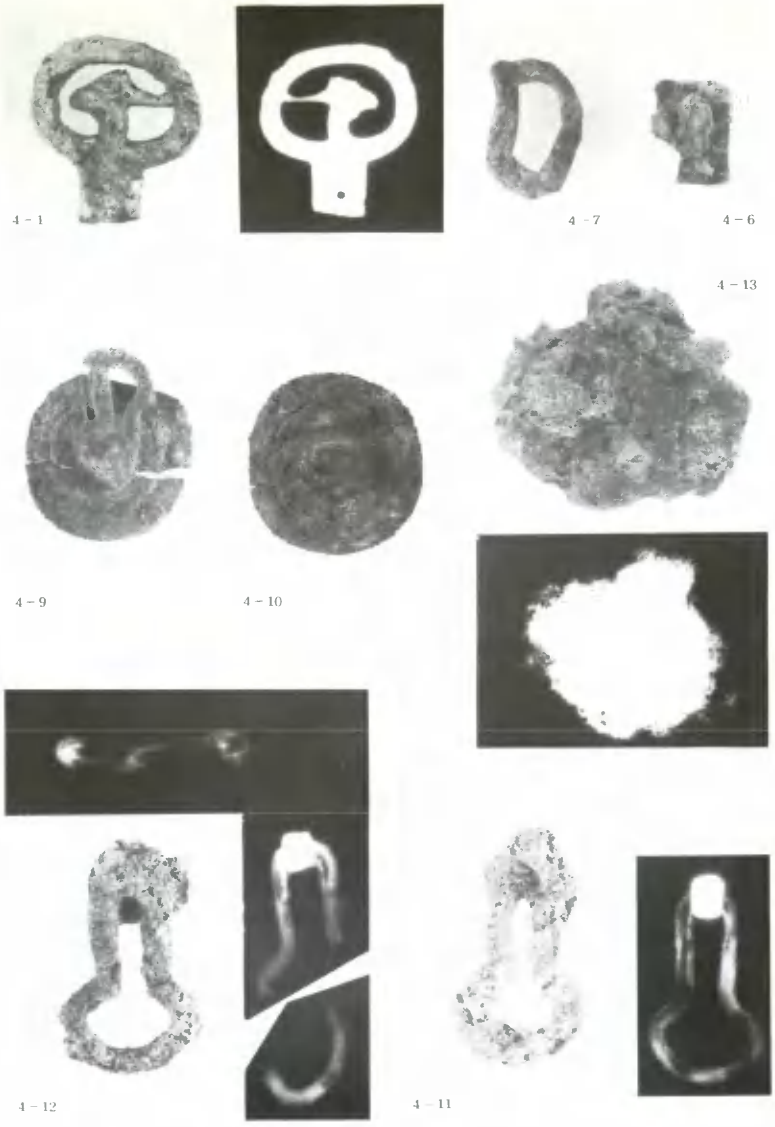
2－1

1－6

2－11

2－10

陶棺蓋及び須恵器（番号は図版一番号と符合）3・1－1を除き（$\frac{1}{4}$）



武具・馬具（番号は，図版一番号と符合）（$\frac{1}{2}$）

図版 8

鎹・釘等　$(\frac{1}{2})$

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　35

備中こうもり塚古墳

昭和54年3月 印 刷
昭和54年3月 発 行

発行　岡山県教育委員会
印刷　岡山県出納局用度課